

キャリアの差は「夫」

「本屋の未来」を語る
子どもの自殺 女子が増加

相葉雅紀×浅利陽介
ちゃんみなが語る愛

昭和33年6月10日創刊
毎月10日発行(3月3日号外) 通巻2078号

Women's Day

AERA

'25.3.10 No.12

アエラ 定価 600円

ラッパー、シンガー

ちゃんみな

【巻頭特集】

女性が変わる。
男性が変わる。
時代が変わる。



清川メッキ工業 清川 肇 社長



高島先生(左)の提案で、研究室の学生と社員で定期交流会をやった。自分でプログラムをつくって教えて、最後に10年後の仕事を各自に考えさせた

難題も「できない」と断らない 父から継ぐ「社長魂」

メッキは、気がつかないところ、いろいろな使われている。基本的な技術はそんなに大きく発展していないが、1ミクロン(1メートルの百万分の1)未満つまりナノ(1ナノメートルは千分の1ミクロン)という超微細な金属粉にまで、メッキできるようにになった。だから「ナノメッキ」とも呼ばれる。

薄膜に使う素材も進化し、極小化は省資源や省エネルギーの意味でも貢献度は大きい。その結果、用途は変わり、半導体を中心にスマホなど電子部品、自動車の自動運転装置、外科手術用の医療機器などへと広がる。

10年たてば、硬さがあるものだけでなく、ふにゃふにゃとしたものにもメッキされている。父で清川メッキ工業の創業者の清川忠会長(84)は「水と空気はメッキできない」と言っていたが、「水と空気以外はメッキできる」となる。すべて、基本的な技術からの積み重ねだ。

企業などのトップには、それぞれの歩んだ道がある。振り返れば、その歩みの始まりが、どこにある。忘れたことはない故郷、一つになって暮らした家族、様々なことを学んだ学校、仕事とは何かを教えてくれた最初の上司、初めて訪れた外国。それらを、ここでは『源流』と呼ぶ。

昨年暮れ、福井市文京3丁目の母校・福井大学を、連載の企画と一緒に訪ねた。1983年4月から工学部の工業化学科で4年、大学院工学研究科の修士課程で2年、博士課程で3年と通算9年、ここで学んだ。とくに大学院ではメッキの研究を重ね、新しい装置の開発にも取り組んだ。清川肇さんがビジネスパーソンとしての『源流』が生まれた、と言う日々だ。

**指導教官のお褒めを照れ臭かったのか
下を向いて聴いた**

「オリジナリティー」は、そのときに指導教官をしてくれた高島正之先生(現・客員教授)が院生に求めた言葉だ。その高島先生が、大学の産学官連携本部で再訪を待っていてくれた。出会いは86年4月、4年生で先生の無機化学の講義を聞き、先生の専門の電池の開発を学んだ。高島先生が振り返る。

「工業化学科は1学年が40人から50人。そのなかで清川さんは黒板にちょっと書いて『これ、どうや?』と指名して聞くと、ちゃんと答え、ちょっと抜けていた。基礎学力があつて『この子は伸びていくな』と感じた」

清川さんは照れ臭いのか、と

きどき下を向いて聴いていた。電池はメッキと化学反応など似たものが多く、講義のうちに役立ったこともある。卒業を控えて父が紹介してくれた大阪府の電機メーカーへの就職は、社長後継への「レール」となるので断つて、修士課程へ進んだ。もつと学びたいというより、進路を考える時間稼ぎだった。

メッキの研究に集中し、独りで父の会社が必要な装置も開発した。先生の話が続く。

「覚えていきます。メッキ分野は指導できる教員がいなかったの、自分1人でやっていた。家業の課題を研究テーマにして、それを発展させたのが修士課程で、もう独り立ちしていた」

『源流』の水源が、溜まっていた時期だった。

修了が近づくと、バブル経済の売り手市場で、就職案内が何百社もきた。そんななか、テレビで富士通の社員が仕事をしながら課長昇格の試験を受ける番組を観て「厳しそうだ、面白そうだな」と思う。しかも、募集がきた半導体の開発拠点は川崎市にあり、一度はいたかった東京に近い。就職先に決めた。

富士通は、母の「お父さんの体調が悪いので福井へ帰ってきて」という電話で、2年9カ月で退社。92年1月に清川メッキ

売り上げ目標も予算も、中期計画もない。他社と比べることも、考えたこともない。依頼されたメッキをすぐにやって納品し、何かあればそのときに考えるのが社風だ



工業へ入社した。最新の電子部品のメッキ装置が入ったとき、技術開発を担当する。

そのころ、高島先生に勧められ、新設の博士課程へ入った。2年目から博士論文の準備を始め、このとき、先生に「オリジナリティーをつくらなければいけないよ」と言われる。

**オリジナリティーに
難しい注文も断らず
新装置をつくった父**

父は、どんなに難しい注文でも「できない」と言わない。難題を実現するために、自ら新しいメッキ装置をつくった。「オリジナリティー」に重なる。その「社長魂」は、職住一体の創業の地に生きている。

清川メッキは80年代に入るまで、2輪車の車輪を支えるリムのメッキ加工が稼ぎ頭だった。だが、新しい技術が出て需要が減ることはみえていた。父は雑誌で電子部品のメッキ加工の記事を読み、「ぜひ進出したい」と思っていたら、大手電機メーカーから電子基板に使う抵抗体にメッキする依頼がきた。

大きさは数ミリで、リムよりも微細なメッキ技術が必要だ。でも、父は「できない」と言うのが嫌いで、「やる」と即答する。電機メーカーは父と話していて「これは知らないな」と見破ったらしいが、他に「やる」という会社がないので、組んで始めた。父は試作を重ねて、80年代後半に軌道へ乗せる。

父が、福井市和田中で清川メッキ工業所(現・清川メッキ工業)を設立したのは63年、清川さんが生まれる前年だ。「源流Again」で、創業の地も訪れた。残っている建物に「Is t Factory」とあつた。

1階は事務所、2階は住宅、後ろが工場、その先は田んぼだった。母・トヨ子さん(83)と弟2人の5人家族だ。

**土日も働いた父母
家族同様の社員と
花見や海水浴へ**

小学校3年生までいた旧家の前に立つと、口調が弾む。

「父母は土日もなく働き、正月くらいしか休みませんでした。社員は家族同様で、昼食も夕食も一緒に食べたし、みんなで花見や海水浴へいきましたね」

県立足羽高校から福井大学工学部、大学院工学研究科へと進み、『源流』が流れ始める。

『源流Again』とは別の日に、89年4月かいた富士通川崎工場へもいった。JR武蔵中原駅前の歩道橋の上から目の前の工場をみると、新しいビルになっていた。配属された半導体開

発チームの建物は、ビルの向こう側にあつた。

国内外で半導体工場を増強していたころで、先輩の大半は応援に派遣され、残ったのは先輩1人と自分だけ。先輩に何をすればいいのか聞くと、「自分で考えて仕事をみつけれ」と言われた。いい教えだった。もつとよかつたのは「半導体とはこういうものだ」と理解でき、ナノテクの解析を学んだ点だ。大学の博士課程で半導体のメッキ装置が開発できたのも、そのおかげだ。修士課程に続いて『源流』の伏流水が増えていく。

長女は山梨県にいて、長男は京都府の会社にいる。長男は大学を出る前に就職の相談にきたが、何か言うかと後継者への「レール」になるといけないので、父の真似をして「自分で探せ。福井へ帰ってくるかどうかは、30歳まで働いてじっくり考えればいい」と答えた。胸の内では「早く帰ってきたいいな」と思っているが、妻と子ども「そろそろ福井へ帰ってこないか」と言ったことはない。

でも、自分が父の会社へ入ったのは27歳。その年齢に近づくと3代目が『源流』に合流してくる日は、遠くはなさそう。

ジャーナリスト 街風隆雄
次回は住友化学の十倉雅和会長です